

急激な腫瘍内出血をきたした若年者乳頭状腎細胞癌の1例

福岡大学筑紫病院泌尿器科 (主任: 有吉朝美教授)

道永 成, 辻 祐治, 中村 英樹

A CASE OF PAPILLARY RENAL CELL CARCINOMA
PRESENTING AS A LARGE CYST
WITH MASSIVE HEMORRHAGE

Shigeru Michinaga, Yuji Tsuji and Hideki Nakamura

From the Department of Urology, Fukuoka University Chikushi Hospital

A case of unusual renal cell carcinoma in a 25-year-old male is reported. The patient complained of right flank pain and a mass in the right upper quadrant of the abdomen. Selective renal arteriography revealed a hypovascular tumor at the lower pole of the right kidney. Right partial nephrectomy was performed. The mass, having a large cystic appearance with hemorrhage, was pathologically confirmed to be papillary renal cell carcinoma. We briefly discussed the specific features of papillary renal cell carcinoma in young adults and cystic changes in renal cell carcinoma.

(Acta Urol. Jpn. 39: 361-363, 1993)

Key words: Papillary renal cell carcinoma, Cystic renal carcinoma

緒 言

30歳以下の若年者の腎細胞癌は稀とされるが、非特異的な病像を持つ場合、その診断はさらに困難となる。われわれは出血性嚢胞性腎病変として発病した25歳男性の乳頭状腎細胞癌の1症例を経験したので文献的考察とともに報告する。

症 例

患者: 25歳, 男性

主訴: 右腹部腫瘍

既往歴・家族歴: 特記すべきことなし

現病歴: 1992年3月14日に右腹部の腫瘍に気づき、軽い圧痛と37°C台の発熱があったが放置していた。しかし翌15日の夕方から疼痛がしだいに増強し、16日に近医を受診したところ腹部超音波検査にて右腎下極に異常な mass を指摘されたため当科を紹介され入院となった。

入院時現症: 身長 170 cm, 体重 55 kg. 右上腹部に表面平滑、呼吸性移動を有する小児頭大で圧痛のある腫瘍を触知する。

入院時検査成績: 血液一般・生化学検査、検尿に異常を認めない。

超音波検査所見: 右腎下極に isoechoic な球形の

mass があり、mass の頭側は楔状に腎盂に突出しており、一部には hypoechoic な部分も認められた。

X線検査所見: 腹部 CT スキャンでは 9×9 cm の low density area が認められ、その周囲を enhance された腎実質が取り巻き、一部には脂肪を思わせる低吸収域も認められた (Fig. 1)。

以上より腎血管筋脂肪腫に広範な出血を伴ったものと考え腎部分切除術を予定した。ところが入院2日目突然、大量の肉眼的血尿が出現し、さらに血中ヘモグロビンも急激に低下してきたため、出血の部位診断および塞栓術による止血を目的として選択的腎動脈造影を行った。

選択的腎動脈造影所見: 腫瘍血管や腫瘍濃染像はなく、avascular mass により伸展偏位した動脈のうちの1本より明らかな出血の所見を認めたのでコイルによる塞栓術を行った (Fig. 2)。

しかし血腫の増大が顕著なため、手術的な病巣切除をただちに行った方がよいと判断し、同日、腎の局所冷却法を併用して右腎部分切除術を行った。

手術所見: 右上腹部の逆L字切開にて経腹膜的に右腎に到達した。腎下極に弾力性のある球形の腫瘍を認め、表面は腎被膜に被われていた。腫瘍は周囲組織と軽度癒着していたが剥離は容易であり、正常腎実質との境界は明瞭で腫瘍に正常腎実質を付けるようにして

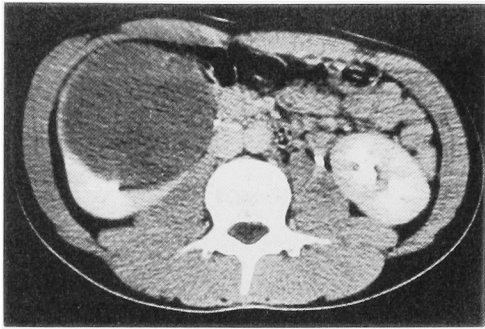


Fig. 1. CT scan shows a large cystic mass in the right kidney.

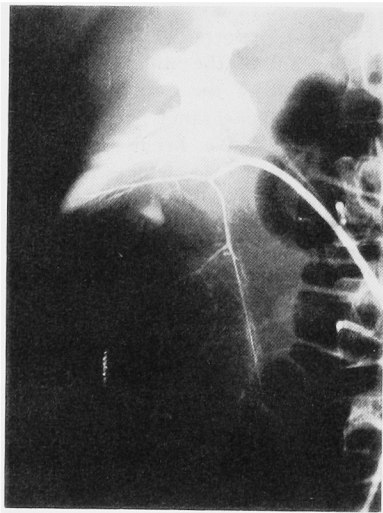


Fig. 2. Selective renal arteriography shows an extensive hypovascular area in the lower pole of the right kidney.

腎部分切除術を行った。

摘出標本：重量 595 g、大きさは 10×10×12 cm。外観は表面平滑で緊満した嚢胞という印象で、割を入れると中に約 400 ml の血性の液体と壊死物質とが貯留しており、その嚢胞内面に黄褐色の乳頭状腫瘍を認めた。

病理組織学的所見：乳頭状配列をした顆粒細胞型の腎細胞癌で泡沫細胞も認められた、また検索した範囲で嚢胞内に上皮は認められなかった (Fig. 3)。

以上より単発性嚢胞状に発育した腎細胞癌と診断されたが、腎癌取扱い規約による発育様式は expansive type で、組織学的には papillary type, common type, granular cell subtype, grade 1>2, INFα, pT2b であった。なお臨床的には NOMO であった。

乳頭状腎細胞癌は非乳頭状腎細胞癌と比べて予後は

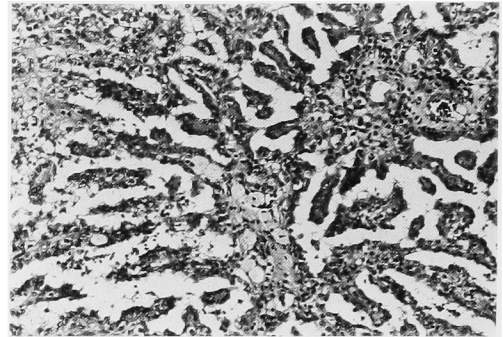


Fig. 3. Histopathological appearance (H.E., ×200). Renal cell carcinoma showing papillary structure.

良好で、病巣も完全に切除されている (治癒切除) と判断されたので根治的腎摘除を改めて行うことなく経過を観察することにした。術後経過は順調で術後20日目に退院し、5ヵ月後の現在、再発・転移の所見を認めていない。

考 察

腎細胞癌は50～60歳を好発年齢とし若年者には稀な疾患である。友政ら¹⁾は39歳以下の腎細胞癌の頻度は3.4～7.8%と報告されているとしているが、昭和62～63年の九州泌尿器科共同研究 (未発表) による510例の観察では、39歳以下の腎細胞癌は3.4%であり、29歳以下になるとわずかに0.7%であった。

一方腎細胞癌のうちの10.0～19.2%をしめるとされる²⁻⁶⁾ 乳頭状腎細胞癌患者の平均年齢は52歳 (27～78歳) で非乳頭状腎細胞癌の平均年齢51歳 (10～82歳) と比較して全体としては特に差はない³⁾。しかし、松崎ら⁷⁾は39歳以下の腎細胞癌14例のうち7例が乳頭状腎細胞癌であることを示し、若年者腎細胞癌に乳頭状の組織学的構築をとるものが多いことを報告している。

乳頭状腎細胞癌の特徴の一つにあげられるものとして血管造影における所見がある。腎細胞癌は一般に hypervascular な所見を呈するのに対し、乳頭状腎細胞癌は多くの場合 hypovascular または avascular な所見を呈するとされる。Mancilla-Jimenez ら⁸⁾は乳頭状腎細胞癌で血管造影を施行した17例すべてが hypovascular か avascular な所見を呈したにもかかわらず、一方非乳頭状の腎細胞癌では89例中わずか15例 (16.9%) が血管に乏しい所見を呈していたに過ぎなかったと述べている。乳頭状腎細胞癌が血管像に乏しい原因として、福岡ら⁹⁾は乳頭状腎細胞癌では腫瘍細胞間に洞様血管腔が形成されないためと推測している。自験例でも血管造影でいわゆる腫瘍血管を認め

ず、腫瘍によって伸展・偏位した血管のみを認めたので、腎細胞癌よりも出血性囊胞性疾患の可能性が大きいと考えていた。

腎細胞癌は通常充実性であるが、4～15%の頻度で囊胞状の変化をきたすことがあるとされている。

Hartman ら⁹⁾は囊胞状の形態を呈する腎細胞癌を、

- 1) Intrinsic multiloculated cystic growth
- 2) Intrinsic uniloculated cystic growth
- 3) Cystic necrosis
- 4) Origin in a preexisting simple cyst

の4型に分類し、intrinsic uniloculated cystic growth のタイプはしばしば乳頭型の組織学的構築を示すと述べている。自験例は単発性囊胞状に発育したもので、入院中に囊胞内出血を合併したことを考えると、上記の2)に相当するものと考えられる。このように腎細胞癌が囊胞状に変化する原因として、腫瘍の退化性変性や自然治癒¹⁰⁾、腫瘍の過成長による血行障害¹¹⁾などが指摘されている。囊胞様変性を起こした腎細胞癌24例に関する和田ら¹²⁾の検討では、症状は腹部腫瘍、血尿、腹痛の順であり、内容液の性状は血液および凝血塊17例(70.8%)と出血を合併することが多く、そのほか漿液性3例(12.5%)、膿性3例(12.5%)と報告している。

乳頭状腎細胞癌は Robson の stage I～II にとどまるものが多く、そのため全体として良好な経過をとるが、同じ stage I の群で比較しても非乳頭状腎細胞癌のものよりも有意に良好な予後を示すといわれる^{2,3)}。われわれも、術後腎細胞癌の確定診断をえて根治的腎摘除術を追加すべきか否か検討したが、low stage であったことに加えて腎部分切除術が治療的切除であったことから特別の治療を追加せず、経過を観察するのみにした。

結 語

25歳男性に特異な病像で発症した乳頭状腎細胞癌の1例について報告した。若年者における腎細胞癌は稀な疾患であるが、乳頭状の組織学的構築をとるものが多い。その適切な診断にあたっては、乳頭状腎細胞癌の特徴とされる血管造影で血管像に乏しいこと、囊胞

性変化をきたす頻度が高いことのふたつを念頭においておく必要がある。

本論文の要旨は第250回日本泌尿器科学会福岡地方会において発表した。

ご校閲いただいた有吉朝美教授に感謝します。

文 献

- 1) 友政 宏, 秦 亮輔, 雨宮 裕, ほか: 若年女性にみられた腎癌の1例. 西日泌尿 51: 1331-1334, 1989
- 2) Blath RA, Mancilla-Jimenez R and Stanley RJ: Clinical comparison between vascular and avascular renal cell carcinoma. J Urol 115: 514-519, 1976
- 3) Mancilla-Jimenez R, Stanley RJ and Blath RA: Papillary renal cell carcinoma. A clinical, radiologic, and pathologic study of 34 cases. Cancer 38: 2469-2480, 1976
- 4) Watson RC, Fleming RJ and Evans JA: Arteriography in the diagnosis of renal carcinoma. Review of 100 cases. Radiology 91: 888-897, 1968
- 5) 眞田壽彦: 腎細胞癌の予後. 日泌尿会誌 72: 10-25, 1981
- 6) 小松洋輔, 畑山 忠, 田中陽一, ほか: 乳頭状腎細胞癌の4例. 臨泌 37: 1003-1006, 1980
- 7) 松崎 理, 長尾孝一, 斎賀 一, ほか: 若年者の腎細胞の特徴. 日病理会誌 74: 412, 1985
- 8) 福岡 洋, 福島修司, 高橋俊博, ほか: Avascular な腎乳頭状腺癌の1例. 臨放線 26: 149-152, 1981
- 9) Hartman DS, Davis CJ Jr, Johns T, et al.: Cystic renal cell carcinoma. Urology 28: 145-153, 1986
- 10) Bartley O and Helander CG: Angiography in spontaneously healed hypernephromas. Acta Radiol 57: 417-426, 1962
- 11) Melicow MM and Becker JA: Radiographic simulation of certain solid tumor of the renal corpus to renal cyst. J Urol 97: 592-610, 1967
- 12) 和田郁生, 森田 隆, 西本 正, ほか: 囊胞様変性を起こした腎細胞癌. 臨泌 41: 1053-1055, 1987

(Received on October 19, 1992)
(Accepted on January 11, 1993)